

ルールを守るということ

東京都 暁星小学校 5年 天羽 俊輔

あの日は大雨だった。僕は、お母さんの運転する車でいつものスーパーへ行った。駐車場に入ったけれど、駐車場はいっぱいだった。でも、僕は知っていた。一台だけ必ず空いているところがある。それは正面入口に一番近い車いす用の場所。僕はお母さんに言った。

「今日だけ停めてしまおうよ。こんな雨の日に、車いすの人なんて買い物に来ないから。」
そして僕たちは、その日だけ車いす専用の場所に停めてしまった。

それから何日か後、車いす専用の駐車スペースにはり紙がしてあった。はり紙には、“このスペースは車いすの方専用の駐車スペースです。一般の方の駐車はご遠慮ください”と書いてあった。はり紙は僕あてだと思った。僕はその場から逃げ出したくなった。お母さんは、

「あのとき、今日だけって思ったけれど、今日だけって思う人がたくさんいたら、毎日になってしまうものね。ルールを守るのは当たり前のことなのに、ごめんね。気をつけるね。」
僕が停めようって言ったのだ。お母さんが悪いのではない。

その日から、街の中のルールが気になるようになった。優先席に座って携帯電話で話している人、車いす用のトイレに入っていく人、信号無視する人。みんなきつと、今日だけ、一回だけって思っているのかもしれない。ルールの意味も、守らなければならない理由も、みんなわかっているはずだ。僕も、車いす用駐車場は車いすの人の便利を考えて、ふつうより広くて、スーパーの入口に一番近いところにあるのだということを知っていた。

その日から、ルールに対する見方が変わった。守らなかつたら困る人のことを思ったら、守るのが当たり前だと思えるようになった。それからスーパーに行くたびに、あの駐車場をチェックしている。その日は車いすのおばあさんを連れておじさんが、買い物を終えて出てきたところだった。そのおじさんが荷物を車に移し終わって空になったカートを見たとき、僕は勇気を出して、おじさんに、

「僕が片づけておきます。」

と話しかけた。そうしたいと僕が思ったのだ。

「本当？ありがとうございます。ご親切に。」

その言葉を聞いて、僕は思った。たった一回だけ、たった一日だけかもしれないけれど、小さな不親切が集まると、大きな迷惑になる。反対に、僕一人の力は小さいかもしれないけれど、小さな親切が集まると大きな優しさに生まれ変わるのだ。誰かに怒られるから仕方なくではなく、誰のためのルールなのかを考えることができれば、駐車場のはり紙もいらなくなる日がくるのだと思う。

2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開かれる。ルールを守れる親切な心で、日本を訪れる人たちを迎えられたらと思う。